

## 様式 C-19

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月20日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520347

研究課題名（和文） 認知モデルにおける主観性と事象構造に関するアジア諸言語の  
類型論的研究

研究課題名（英文） A Typological Research of Asian Languages on Subjectivity and  
Event Structure in the Cognitive Model

研究代表者

上原 聡 (UEHARA SATOSHI)

東北大学・高等教育開発推進センター・教授

研究者番号：20292352

研究成果の概要（和文）：本研究は、最近の認知言語学の進展により研究が進んだ「主観性」に関して、言語類型論（対照言語学）の手法を用いて、言語間にその差異が見られるか否かを、アジアの諸言語を対象として調査・分析することにより検証したものである。関連する言語現象別に主観性表現を分類し、語彙化・文法化のパターンの差異により言語の類型化を行った。これまで語順類型など言語の客観的な面をもとに類型が指摘されていたが、主観性についても類型が可能であること、そしてその多様性の様相を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： We have made cognitive linguistic investigations on Asian languages in terms of linguistic subjectivity to examine its patterns of variation for its typological classification. This research based the notion of subjectivity on the recent advancement in the Cognitive Linguistic studies of linguistic subjectivity and utilized the contrastive linguistic methods in linguistic typology in investigating patterns of lexicalization and grammaticalization of subjective expressions. One of the research findings is that languages can be classified into types and subtypes in terms of subjectivity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：語用論・認知言語学・主観性・類型論・アジア諸語

### 1. 研究開始当初の背景

(1)認知言語学の研究によって、言語がそしてその現象が深く主観性(subjectivity)に根ざすものであることが明らかになってきた。これまで客観的な対象であるとされてきた、言語構造や文法構造が際立ちの認識や視点の置き方などの言語主体の持つ認知プロセスの反映であり（ラネカーなど）、意味変化やそれに関わる解釈が言語主体に備わってい

る認知能力によって作り上げられる（トローゴットなど）ことが理解されてきた。

(2)言語類型論は、言語研究の対象を個別言語から世界の言語に広げ、語順・形態といった文法的特長によって言語を類型化し、言語の個性性／多様性と普遍性の両面を、実際の言語の記述による検証を経て捉えようとする研究分野である。特に認知言語学的・構文主

義的研究の流れを汲み、統語理論を言語類型論の立場から再検討したクロフトなどその最近の理論的展開には目覚ましいものがある。しかしながら事象構造に関わる主観性に関する記述・検証に関しては、これまで類型化のもととなる言語の文法的特徴として中心的な扱いを受けたとは言えず、言語類型論の知見が十分に活かされていないという状況であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、**認知言語学**によって明らかになった**言語の主観性**、特にその**命題事象**内に表出する程度や様式に関して、言語間の多様性と類型化の可能性を、**アジアの諸言語**を主に**言語類型論**の記述的・実証的な研究方法によって明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

(1) 事象構造、動詞意味論の主観性に関わる研究のうち、これまで中心的に研究してきた移動構文などに関する研究成果を、他の構文の研究の雛形になるような形で集約し、受動構文など他の関連構文に関しても研究を進める。各構文に関する記述的なデータの収集作業を精力的に行い、そのデータにもとづいた汎言語的に適用可能なその主観性の定義の整理・設定・検証を行う。

(2) 言語における「主観性」のプロトタイプ的な定義を検討しながら、その定義に基づく「主観性」に関わる言語のデータの収集・分析を、特に従来の認知言語学のデータの中心となった印欧語以外の言語であるアジアの言語において集中的に行う。特にどのような事象を表す構文に「主観性」の表出が見られるかのパターンが見られれば、それを集中的に各言語において見て行くことにする。

(3) 各言語間の様々な事象を表す構文の類似点・差異を指摘し、類型化を検討する。また、個別言語の多様性がいかなる要因（の組み合わせ）で説明できるかを考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 言語の「主観性」についての定義

言語学一般に限っても「主観性」という言葉が多岐に使用され、また subjectivity/subjectification という英語に関しても、認知言語学のラネカーのそれと言語類型論のトローゴットのそれでは異なる言語現象を対象とすることも多いため、英語での subjectivity 理論やその研究成果を正しく理解・導入する上で、その本研究での定義を汎言語的に適用可能な形で明確にすることが必要となった。

これに関して一定の成果を納めることが

でき、ラネカーの subjectivity の理論はその定義や対象とされた言語現象とその議論の上からも「主体性」と訳されるべきものであり、しかしながらトローゴットのものとも共通する「主観性」とも訳せる現象も見られることなどを明らかにした。（この成果については、最終年度末の3月に、主観性研究の著名な池上嘉彦博士・廣瀬幸夫博士・中村芳久博士を含む計11名に上る研究者が一堂に会してのシンポジウムを主催するなどし、公開発表した。そのシンポジウムの論文集を出版予定。）

認知言語学での subjectivity の現象を分類し明確にし、「主観性」「主体性」などに訳し分けることは、日本語学を始めとした日本での言語学諸学会の主観性研究にも意義のあることである。

### (2) アジア諸言語を中心とした主観性に関わる言語現象データの収集・分析

文献資料としてアジア諸言語を中心に多言語の記述文法書(reference grammar)、更に事象構造の言語類型に関する文献の中から、主観性現象に関する記述や議論の要点を整理するとともに、関連する用例データの収集・分析を行った。それにより、明らかになった主なことを以下にまとめる。

① ラネカーなど英語の現象をもとに主観性について議論されていることが、日本語などにも見られること、そしてその異同についても検証された。また、日英両語で対照的にいわば二元論的に捉えられていた現象も、韓国語・中国語・タイ語他において様々な程度で見られることが検証された。

② 通言語的に表現の主観性が見られる事象として、移動事象構文、授与構文、位置関係構文、内的状態述語構文、参与者指示表現として敬語（社会的直示）構文などが挙げられる。

言語の主観性研究に言語間差異の概念を導入し、その言語の表現における多様性を、そのデータを収集して実証的に示した意義は大きい。

### (3) 通言語的な差異および類型

言語間では、主観的捉えを表す表現の言語化（語彙化を含む）・慣習化(conventionalization)のパターンと程度において差が見られる。語彙化（直示述語化）するか構文形式によって示されるか、無標となるか有標となるか、どの事象構文において慣習化されるかにより、言語の類型化が可能となった。

これまでの類型論的研究は、客観的に捉えられる事象に関する言語間差異を見出すことに終始していたとしても過言ではなく、言

語類型論において主観性に関して統一的に取り上げその類型化の可能性を示したことは新知見である。

#### (4) 今後の展望

本研究により残された課題・今後の展開の可能性として次のようなものが挙げられる。

- ① 資料・文献を増やしデータ収集・分析をさらに進め、また対象とする言語の数を増やし、より汎言語的なデータに基づいた主観性言語現象の多様性の様相の検証と類型化を進める。
- ② 英語では「主観性」と同じ subjectivity と訳されるなど近似の概念である「主体性」についてもさらに明確にし、それについても言語類型論的手法を用いて研究を行う。
- ③ 本研究は「主観性」を中心としたが、今後はこれを展開させ、「主観化」及び「間主観性／化」についても、共時的観点・通時的（文法化の）観点を合わせ考察・分析を進める。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

- ① 小野尚之「サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語」藤田、松本、児玉、谷口（編）『最新言語理論を英語教育に活用する』開拓社 pp. 323-335. 2012（査読無）
- ② Uehara, Satoshi. “The socio-cultural motivation of referent honorifics in Korean and Japanese” In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Motivation in Grammar and the Lexicon*. John Benjamins. 191-211, 2011（査読有）
- ③ 上原聡「主観性に関する言語の対照と類型」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座 5：主観性と主体性』ひつじ書房、69-91 頁、2011 年（査読無）
- ④ Thepkanjana, Kingkarn & Satoshi Uehara. “Resultative constructions with “implied-result” and “entailed-result” verbs in Thai and English: A contrastive study.” *Linguistics* 47-3: 589-618, 2009（査読有）
- ⑤ Thepkanjana, Kingkarn & Satoshi Uehara. “The verb of giving in Thai and Mandarin Chinese as a case of polysemy: A comparative study.” *Language Sciences*.30, 621-651, 2008（査読有）
- ⑥ 鄭世桓・上原聡「日韓語の補助動詞「テシマウ」と「a pelita」と「ko malta」について：文法化の観点からの対照分析」『日本認知言語学会論文集第 8 巻』461-471、日本認知言語学会、2008 年（査読無）

〔学会発表〕（計 29 件）

- ① 上原聡「ラネカーの subjectivity 理論における主体性と主観性—言語類型論の観点から—」『言語と（間）主観性研究フォーラム in 仙台「ラネカーの視点構図と（間）主観性』』東北大学、2012 年 3 月 25 日
- ② Uehara, Satoshi “The cognitive theory of subjectivity in a cross-linguistic perspective: Zero 1st person pronouns in English, Thai and Japanese” The 11th International Cognitive Linguistics Conference, Xi’an International Studies University, Friday, July 16, 2011
- ③ 上原聡「Langacker（1985）の subjectivity 理論から通言語的な主観性の理論へ」『日本英文学会第 62 回中部支部大会 シンポジウム「ラネカー視点構図の射程」』金沢大学、2010 年 10 月 17 日
- ④ Ono, Naoyuki. “The Paralles Lost: A Lexical Resource View of Motion and Resultative Constructions.” Chulalongkorn-Tohoku Cognitive and Typological Linguistics Symposium. Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand. 2010. 8.27-28
- ⑤ 上原聡「日本語の形容詞と動詞の区別における形態と意味：韓国語との対照を中心に」国語研日本語レキシコン共同研究プロジェクト発表会、国立国語研究所、2010 年 7 月 11 日
- ⑥ 上原聡「主観性についての言語対照—認知言語学と類型論のコラボ」『東北大学大学院国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究センター公開ワークショップ：認知的アプローチと言語類型論の融合』東北大学、2010 年 2 月 6 日
- ⑦ 上原聡「言葉と視点の日英語比較—翻訳を例としたテキスト分析の観点から—」『日本語日本文学研究の最前線』韓国中央大学大学院、2009 年 3 月 20 日
- ⑧ 上原聡「頻度が形作る活用形態の（不）規則性—用法基盤モデルの観点から—」、日本言語学会第 137 回大会 公開シンポジウム「言語変化のモデル」講演、金沢大学、2008 年 11 月 30 日

〔図書〕(計1件)

①小野尚之(編著)、ひつじ書房、結果構文のタイポロジー、2009、487

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上原 聡 (UEHARA SATOSHI)  
東北大学・高等教育開発推進センター・教授  
研究者番号：20292352

### (2) 研究分担者

小野 尚之 (ONO NAOYUKI)  
東北大学・国際文化研究科・教授  
研究者番号：50214185

### (3) 連携研究者

池上 嘉彦 (IKEGAMI YOSHIHIKO)  
昭和女子大学・文学研究科・教授  
研究者番号：90012327

山梨 正明 (YAMANASI MASAOKI)  
京都大学・人間環境学研究科・教授  
研究者番号：80107086

### (4) 研究協力者

Thepkanjana, Kingkarn, Ph. D.

Chulalongkorn University (Thailand),  
Linguistics Department, Associate  
Professor

Croft, William, Ph.D.  
University of New Mexico (USA),  
Linguistics Department, Professor

Sanders, Robert, Ph.D.  
University of Auckland (New Zealand),  
Faculty of Letters, Senior Lecturer